連載「大友時代を生きた人々」

国際文化学部鹿毛敏夫教授の「善妙～最後の「倭寇的遣明船」使節～」掲載

●大分合同新聞朝刊　2016年9月17日（土）

大友時代を生きた人々

――鹿毛　敏夫

善妙

最後の「倭寇的遣明船」使節

中世という時代は、禅僧が国家間外交の使節として活躍した時代です。豊後大友家からも、義鑑の時代に寿光と清梁という名の禅僧が、義鎮の時には清授と徳陽が、ともに中国明に派遣されたことはこれまで紹介してきました。

15世紀初めの足利義満が獲得した対明外交権は、16世紀には周防の大内家が継承し、大内義隆は天文8（1539）年度と同16年度の遣明船を独占的に派遣します。つまり、大内氏は日本国王名義を有する対明外交権の正式な継承者として、中国皇帝に貢物を贈り、勘合貿易を実現できたのです。

これに対して大友氏の場合は、正式な外交権者として主体的な対明交渉を行う資格を有していません。ということは、前述した寿光ら大友氏の外交僧たちは、日本国からの正式な使節と認められる確証のない状況下で中国に派遣されたことになります。

この点で大友氏の対明外交政策は、中国側から認められれば正式な朝貢使節として振る舞い、認められなければ警備の手薄な南方海域で密貿易をして帰国するという、表裏を使い分けたものと言うことができます。回数的には後者の密貿易の方が圧倒的に多く、毎回派遣される外交僧や船の乗組員らも、半ば確信犯的に密貿易の実利を第一に考えていたと言えるでしょう。

しかしながら、義鑑・義鎮の2代にわたって続けられたこの危うい対明外交政策もついに終焉の時を迎えます。

弘治3（1557）年10月、義鎮が仕立てた遣明船に使僧として乗り込んだ善妙は、浙江省舟山島の岑港に船を停泊させ、明側の上陸許可を待ちます。ところが、同時に入港した中国人倭寇の首領王直を捕らえた明官軍と、王直一派との間で軍事衝突が始まり、善妙ら大友氏使節団も明政府から海賊一味としての扱いを受けることとなったのです。

中国側の記録「日本一鑑」によると、翌年2月に善妙らは自らの船を捨て、岑港の港町内部に立てこもります。さらに舟山島内陸部に逃げ込んで新たな船を建造し、岑港とは異なる港から出航して、その数カ月後には南下した福建省の港に現れて密貿易をしています。

しかしながら、この善妙を最後に、日本の戦国大名による遣明船の記録は途絶えます。16世紀後半の世界史の大きなうねりの中、1550年代までの中国を相手とした「倭寇的遣明船」の時代は終わりを遂げ、1570年代から新たに東南アジア諸国を相手とする「南蛮貿易船」の時代へと、大きくシフトしていくのです。

善妙らの遣明船が停泊した岑港＝中国浙江省舟山島

（名古屋学院大学国際文化学部教授、大分市出身）

＝毎月1回掲載＝